

凱旋祭

泉鏡花作

一

紫の幕、紅の旗、空の色の青く晴れたる、草木の色
の緑なる、唯うつくしきもの、彌が上に重なり合
ひ、打混じて、譬へば大なるの幻燈の花輪車の輪を
造りて、烈しく舞出で、舞込むが見え候のみ。何を
か緒として順序よく申上げ候べき。全市街は其日
朝まだきより、七色を以て彩られ候と申すより他は
これなく候。

紀元千八百九十五年一月一日の凱旋祭は、小生が
覺えたる觀世物の中に最も偉なるものに候ひき。

知事の君をはじめとして、縣下に有數なる顯官、文
官、武官の數を盡し、有志の紳商、在野の紳士など、
盡く銀山閣といふ俱樂部組織の館に會して、凡そ半
月あまり趣向を凝されたるものに候よし。

先づ巽公園内にござ候記念碑の銅像を以て祭
の中心といたし、こゝを式場にあて候。

この銅像は丈一丈六尺と申すことにて、臺石は二

間に餘り候はむ、兀如として喬木の梢に立ちをいり候。右手に提げたる百鍊鐵の劍は霜を浴び月に映じて、年紀古れども錆色見え、仰ぐに日の光も寒く輝き候。

銅像の頭より八方に綱を曳きて、數千の鬼灯提灯を繋ぎ懸け候が、これをこそ趣向と申せ。一ツ一ツ皆眞蒼に彩り候。提灯の表には、眉を描き、鼻を描き、眼を描き、口を描きて、人の顔になぞらへ候。さて目も、口も、鼻も、眉も、一樣普通のものにてはこれなく、いづれも、ゆがみ、ひそみ、まがり、うねりなど仕り、なかには念入にて、醉狂にも、眞赤な舌を吐かせたるが見え候。皆切取つたる敵兵の首の形にて候よし。されば其色の蒼きは死相をあらはしたるものに候はむか。下の臺は、切口なればとて赤く塗り候。上の臺は、尋常に黒くいたし、辨髪とか申すことにて、一々蕨繩にてぶら／＼と釣り下げ候。一ツは仰向き、一ツは俯向き、横になるもあれば、縦になりたるもありて、風の吹くたびに動き候よ。

催もよほしの慫かくることは、たゞ九牛きうぎうの一毛いちまうに過ぎすず候さふらふ。凱がい

旋門せんもんは申まをすまでもなく、一廓いっくわく數百金きんを以もつて建たられ

候さふらふ。恰あたかも記念碑きねんひの正しやうめん面にむかひあひたるが見みえ候さふらふ。

また其その傍かたはらに、これこそ見物けんぶつに候さふらふへ。こゝに三抱みかくへに

餘あまる山やま櫻さくらの遠山とほやま櫻さくらとて有名いづめいなるがござ候さふらふ。其そのこす

梢あしより根ねに至いたるまで、枝えだも、葉はも、幹みきも、すべて青あを

き色の毛布まうふにて蔽おほひ包つみて、見上みあぐるばかり巨大きよだいな

象ぞうの形かたちに拵しつりへ候さふらふ。

毛布まうふはすべて旅團りよだんの兵員へいゐんが、遠征えんせいの際きはに用もちゐたる

をつかひ候さふらふよし。其數そのすう八千七百枚まいと承うけたまわり候さふらふ。長蛇ちやうだ

の如ごとき巨象きよぞうの鼻はなは、西にしの方かたにさしたる枝えだなりに二蛇ふたうね

り蜿うねりて唧筒ポンプを見みるやう、空高そらたかき梢しやうより樹下じゆかを流ながるゝ

小川をがわに臨のぞみて、いま水みづを吸すふ處ところに候さふらふ。脚あしは太ふとく、折をり

から一員あんの騎兵きへいの通り合あわせ候さふらふが、兜かぶと形かたちの軍帽ぐんぼうの頂いたゞき

より、爪つめの裏うらまで、全體ぜんたい唯ただ其その前脚まへあしの後うしろにかくれて、

纒むすかに駒こまの尾をのさきのみ、此方こなたより見え申まをし候さふらふ。かば

かりなる巨像きよぞうの横腹よこはらをば、眞ま四角ししかくに切り開ひらきて、板いた

を渡わたし、こゝのみ赤あかき氈せんを敷しき詰つめて、踊子をどりこが舞まひの舞ぶた

臺いにいたし候さふらふ。葉櫻はなくらの深ふか翠みどりしたゝるばかりの頃ころに

候へば、舞臺の上下にいや繁りに繁りたる櫻の葉の
洩れ出で候て、舞臺は薄暗く、緋の毛氈の色も黒ず
みて、ものゝしめやかなるなかに、隣國を隔てたる
連山の巔 遠く二ツばかり眉を描きて見渡され候。
遠山櫻あるあたりは、公園の中にも、眺望の勝景
第一と呼ばれたる處に候へば、式の如き巨大なる怪
獸の腹の下、脚の四ツある間を透して、城の櫓見え、
森も見え、橋も見え、日傘さして橋の上渡り來るう
つくしき女の藤色の衣の色、恰も藤の花一片、一片
の藤の花、いと／＼小さく、ちら／＼眺められ候ひ
き。

こは月のはじめより造りかけて、凱旋祭の前一日
の晝すぎまでに出來上り候を、一度見たる時のこと
に有之候。

夜に入ればこの巨象の兩個の眼に電燈を灯し候。
折から曇天に候ひし。一體に樹立深く、柳松など生
茂りて、くらきなかに、其蒼白なる光を洩し、巨象
の形は小山の如く、喬木の梢を籠めて、雲低き天に
接し、朦朧として、公園の一方にあらはれ候時こ
そ怪獸は物凄まじき其本色を顯し、雄大なる趣を
備へてわれ／＼の眼には映じたれ。白晝はやはり唯

毛布を以て包みなしたる山、櫻の妖精に他ならず候
ひし。雲はいよ／＼重く、夜はます／＼闇くなり候
まゝ、炬の如き一雙の眼、暗夜に水銀の光を放ちて、
この北の方間三十間、小川の流一たび灌ぎて、池と
なり候。池のなかばに、五條の噴水、青龍の口より
ほとばしり、なかぞらのやみをこぼれて篠つくばか
り降りかゝる吹上げの水を照し、相對して、またさ
きに申上候。銅像の右手に提げたる百鍊鐵の劍に
反映して、次第に黒くなりまさる漆の如き公園の樹
立の間に言ふべからざる森嚴の趣を呈し候、いまに
も雨降り候やうなれば、人さきに立歸り申候。

あくれば凱旋祭の當日、人々が案じに案じたる
 天候は意外にもおだやかに、東雲より密雲破れて日
 光を洩し候が、午前に到りて晴れ、晝少しすぎるよ
 り天晴なる快晴となり澄し候。

さればこそ前申上げ候通り、たゞうつくしく販
 かに候ひし、全市の光景、何より申上げ候はむ。こゝ
 に繰返してまた單に一幅わが縣全市の圖は、七色を
 以てなどりて彩られ候やうなるおもひの、筆執れば
 この紙面にも浮びてあり／＼と見え候。いかに貴下、
 左様に候はずや。黄なる、紫なる、紅なる、いろ／
 々の旗天を蔽ひて大鳥の群れたる如き、旗の透間の
 空青き、樹々の葉の翠なる、路を行く人の髪の毛、
 簪の白き、手絡の緋なる、帯の錦、袖の綾、薔薇の
 香、伽羅の薫の薫ずるなかに、この身體一ツはさま
 れて、歩行くにあらず立停るといふにもあらで、押
 され／＼市中をいきつくたぴに一步づゝ式場近く
 進み候。横の町も、縦の町も、角も、辻も、山下も、
 坂の上も、隣の小路もたゞ人のけはひの轟々とは
 かり遠波の寄するかと、ひツそりしたるなかに、或

は高く、或は低く、遠くなり、近くなりて、耳底に響き候のみ。裾の埃、歩の砂に、兩側の二階家の欄干に、果しなくひろげかけたる紅の毛氈も白くなりて、仰げば打重なる見物の男女が顔も臃げなる、中空にはむら／＼と何にか候らむ、陽炎の如きもの立ち迷ひ候。

萬丈の塵の中に人の家の屋根より高き處々、中空に斑々として目覺しき牡丹の花の翻りて見え候。こは大なる母衣の上に書いたるにて、片端には彫刻したる獅子の頭を縫ひつけ、片端には絲を束ねてふつさりと揃へたるを結び着け候。この尾と、其頭と、及び件の牡丹の花描いたる母衣とを以て一頭の獅子にあひなり候。胴中には青竹を破りて曲げて環にしたるを幾處にか入れて、竹の兩はしには屈竟の壮佼居て、支へて、膨らかに幌をあげをり候。頭は一人の手して、力逞ましきが猪首にかゝげ持ちて、朱盆の如き口を張り、またふさぎなどして威を示し候。都度、仕掛を以てカツ／＼と金色の牙の鳴るが聞え候。尾のつけもとは、こゝにも竹の棹つけて支へながら、人の軒より高く突上げ、鷹揚に右左に振り動かし申候。何貫目やらむ尾にせる絲をば、眞紅の

色に染めたれば、紅の細き瀧支ふる雲なき中空より
逆におちて風に揺らるゝ趣見え、要するに空間に
乗きたる獸王の、花々しき牡丹の花衣着けながら躍
り狂ふにことならず、目覺しき獅子の皮の、かゝる
牡丹の母衣の中に、三味、胡弓、笛、太鼓、鼓を備
へて、節をかしく、且つ行き、且つ鳴して一ゆるぎ
しては式場さして近づき候。母衣の裾よりうつくし
き衣の裾、ちひさき女の足などこぼれ出でゝ見え候
は、歌妓の上手をばつどへ入れて、この樂器を司ら
せたるものに候へばなり。

おなじ仕組の同じ獅子の、唯一つには留まらで、
主立つたる町々より一つ宛、すべて十五六頭ニり出
だし候が、群集のなかを處々横斷し、點綴して、白
き地に牡丹の花、人を蔽ひて見え候。

四

群集ばら／＼と一齊に左右に分れ候。

不意なれば蹠跟めきながら、おされて、人の軒に仰き依りつゝ、何事ぞと存じ候に、黒き、長き物ずる／＼と来て、町の中央を一文字に貫きながら矢の如く駈け抜け候。

これをば心付き候時は、ハヤ其物體の頭は二三十間わが眼の前を走り去り候て、いまは其胸中あたり連りに進行いたしをり候が、恰も風の絲を繰出す如く、走馬燈籠の間斷なきやう俄に果つべくも見えず申さず。唯人の頭も、顔も、黒く塗りて、肩より胸、背、下腹のあたりまで、墨もていやが上に濃く塗りこくり、赤禪襠着けたる臀、脛、足、踵、これをば朱を以て眞赤に色染めたるおなじ扮装の壮佼たち、幾百人か。一人行く前の人の後へ後へと繋ぎあひ候が、繰出す如くずん／＼と行き候。およそ半時間は連續いたし候ひしならむ、やがて最後の一人の、身體黒く足赤きが眼前をよぎり候あと、またひら／＼と群集左右より寄せ合せて、兩側に別れたる路を塞ぎ候時、其の過行きし方を打眺め候へば、彼の怪物

の全體は、遙なる向の坂をいま蛭り／＼のぼり候首
尾の全きを、いかにも蜈蚣と見受候。あれはと見る
間に百尺波状の黒線の左右より、二條の砂煙眞白に
ぱつと立つたれば、其尾のあたりは埃にかくれて、
躍然として擡げたる其臼の如き頭のみ坂の上り盡く
る處 雲の如き大銀杏の梢とならびて、見るがうち
に、またたゞ七色の道路のみ、獅子の背のみ眺めら
れて、蜈蚣は眼界を去り候。疾く既に式場に着し候
ひけむ、風聞によれば、市内各處に於ける勞働者、
たとへばぼてふり、車夫、日傭取などいふものゝ総
人數をあげたる、意匠の俄に候とよ。

彼の巨象と、幾頭の獅子と、この蜈蚣と、この群
集とが遂に皆式場に會したることをおん含の上、靜
にお考へあひなり候はゞ、いかなる御感じか御胸に
浮び候や。

五

別に凱旋門と、生首提灯と小生は申し候。人の
 目鼻書きて、青く塗りて、血の色染めて、黒き蕨
 繩着けたる提灯と、龍の口なる五條の噴水と、銅像
 と、この他に今も眼に染み、脳に印して覚え候は、
 式場なる公園の片隅に、人を避けて悄然と立ちて、
 淋しげにあたりを見まはしをられ候、一箇年若き佳
 人にござ候。何といふいはれもあらで、薄紫のか
 はりたる、藤色の衣着けられ候ひき。
 このたび戦死したる少尉B氏の令閨に候。また小生
 知人にござ候。

あらゆる人の嬉しげに、楽しげに、をかしげに顔
 色の見え候に、小生はさて置きて夫人のみあはれに
 悄れて見え候は、人いきりにやのぼせたまひしと案
 じられ、近う寄り聲をかけて、もの問はむと存じ候
 折から、おツといふ聲、人なだれを打つて立騒ぎ、
 悲鳴をあげて逃げ惑ふ女たちは、水車の齒にかゝり
 て撥ね飛ばされ候やう、倒れては遁げ、轉びては遁
 げ、うづまいて来る大蜈蚣のぐる／＼と巻き込む
 環のなかをこぼれ出で候が、令閨とおよび五三人は

其中心になりて、十重二十重に巻きこまれ、遁るゝ隙なく伏まるび候ひし。警官駈けつけて後、他は皆無事に起上り候に、うつくしき人のみは、其まゝ裳をまげて、起たず横はり候。塵埃の其つやゝかなる黒髪を汚す間もなく、衣紋の亂るゝまもなく、恚うはなりはてられ候ひき。

むかでは、これがために寸断され、此處に六尺、彼處に二尺、三尺、五尺、七尺、一尺、五寸になり、一分になり、寸々に切り刻まれ候が、身體の黒き、足の赤き、切れめノゝに酒氣を帯びて、一つづゝうごめくを見申し候。

日暮れて式場なるは申すまでもなく、十萬の家軒ごとに、おなじ生首提灯の、しかも丈三尺ばかりなるを揃うて一齊に灯し候へば、市内の隈々塵塚の片隅までも、眞蒼き晝とあひなり候。白く染め抜いたる、目、口、鼻など、大路小路の地の上に影を宿して、青き灯のなかにたとへば蝶の舞ふ如く臘燭のまたゝくにつれて、ふはノゝと其幻の浮いてあるき候ひし。ひとり、唯、單に、一字の門のみ、生首に灯さで、淋しく暗かりしを、怪しといふ者候ひしが、さる人は皆人の心も、ことのやうをも知らざるにて

候。其夜更けて後、俄然として暴風起り、須臾のま
に大方の提灯を吹き飛ばし、残らず灯きえて眞闇に
なり申し候。闇夜のなかに、唯一ツ凄まじき音聞え
候は、大木の吹折られたるに候よし。さることのく
はしくは申上げず候。唯今風の音聞え候。何につけ
てもなつかしく候。

月 日

ぢい様

【完】